

「鳥獣人物戯画」甲・乙巻の研究

著者	五乙女 晴恵
号	175
発行年	2003
URL	http://hdl.handle.net/10097/14292

そうとめ　　はる　　え 五 月 女　　晴　　恵

学 位 の 種 類　　博 士 (文 学)

学 位 記 番 号　　文博第 175 号

学位授与年月日　　平成16年 3 月25日

学位授与の要件　　学位規則第 4 条第 1 項該当

研 究 科 ・ 専 攻　　東北大学大学院文学研究科（博士課程後期 3 年の課程）

歴 史 科 学 専 攻

学 位 論 文 題 目　　「鳥獣人物戯画」甲・乙巻の研究

論 文 審 査 委 員　　(主査)

教 授　有 賀 祥 隆　　助教授　長 岡 龍 作
教 授　田 中 英 道
教 授　尾 崎 彰 宏
教 授　仁 平 道 明
教 授　佐 藤 弘 夫

論 文 内 容 の 要 旨

京都梶尾の高山寺に伝来する国宝絵巻「鳥獣人物戯画」は、甲・乙・丙・丁の四巻からなる。そのうち、本稿で取りあげるのは、共に十二世紀後半に制作されたと考えられている甲巻と乙巻とであり、本研究は、その甲・乙両巻の、筆者問題、主題、制作目的の解明を試みたものである。

本稿は、三章構成であり、その第一章では、「甲・乙巻の筆者問題について一宮廷絵師制作の可能性をめぐって」と題して、現在、絵仏師筆者説が有力視されている甲・乙両巻に、そのような有力説に反して、宮廷絵師によって制作された可能性を示す要素が数多く見出せることを指摘した。

第一章の「はじめに」では、上野憲示氏や柳澤孝氏等の諸先学によって既に指摘されているように、甲・乙両巻には、宮廷絵師・藤原宗弘周辺で制作されたと考えられる「真言八祖行状図」と共通した描写表現が幾つも認められることを再確認して、宮廷絵師筆者説が成り立つ可能性があることを示した。

第一章第一節では、従来、仏画中に描かれた動物との類似性ばかりが強調されて来た感のある「鳥獣人物戯画」乙巻に焦点を当て、その動物や霊獣の描き方や捉え方には、実は、「伴大納言絵巻」・「彦火々出見尊絵巻」・「年中行事絵巻」といった宮廷絵師によって制作された絵巻と共通する要素が多数確認できることを指摘した。特に、乙巻の特性とされる、動物たちの姿を、実際の観察に基づくかのように、リアルに生き生きと描き表すという特徴は、「年中行事絵巻」に認められる動物表現に非常に近似したものであることを確認した。

第二節では、もう一方の甲巻に焦点を当て、まずは、乙巻と非常に近似した動物表現が確認された「年中行事絵巻」との比較を行い、その結果、登場者の姿態表現・出で立ち・持ち物等の点で多くの共通項が存在することを確認した。このように、「鳥獣人物戯画」甲・乙両巻には、姿態表現や動物の捉え方、登場者の出で立ち・持ち物等の点において、「年中行事絵巻」との間に多くの共通要素が見出せる。そして、このことは、「鳥獣人物戯画」甲・乙両巻と「年中行事絵巻」とが、極めて近い環境において制作された可能性があることを意味するようにも思われる。

「年中行事絵巻」の原本を制作したのは、常盤源二光長を中心とした複数の宮廷絵師たちであるというのがほぼ通説となっている。また、黒田泰三氏の研究等によって、「伴大納言絵巻」の筆者も、「年中行事絵巻」と同じ常盤光長と考えられることが指摘されている。つまり、この黒田氏の結論に従えば、もし、「鳥獣人物戯画」甲・乙巻の制作の場が、「年中行事絵巻」のそれと密接に関係するのであれば、それは同時に、「伴大納言絵巻」とも極めて近い制作環境を有していたことを意味するであろう。「鳥獣人物戯画」乙巻が、動物の描き方の点において、「伴大納言絵巻」との間に幾つかの共通項を持つことは、第一章第一節において、既に確認しており、そのような仮説が成り立つ可能性があることが、示唆されている。そして、次には当然、「鳥獣人物戯画」甲巻と「伴大納言絵巻」との間にも共通項が存在することを立証する必要があるだろう。そこで、この両絵巻の比較を行ったところ、次のような四つの共通項が確認できた。

第一に、類似した姿態表現が幾つも見出せること。第二には、いわゆる異時同図法の用い方が共通しており、どちらの絵巻においても、スピードを伴う一瞬の動作を表現するために用いられており、その一瞬に行われた一連の姿態の変化をコマおくり的に提示して、しかも、そのスピード感さえも巧みに表現している。第三には、内容の展開のさせ方に共通の手法が用いられていること。それは、各々の場所で各々の行為をする別人たちを描き並べたと見える部分が、同時に、特定の登場者が、時間の経過とともに行う一連の行為を順に描き表したものと捉えられるように表現するという手法や、事件の結果をその原因よりも前に画面に登場させるという手法の使用である。第四には、描かれた登場者を、能動的に行う者と、それを見物する者とに分けることができ、しかも、後者が豊富に描かれていること。

以上のような比較結果から、「伴大納言絵巻」は、乙巻との間だけでなく、甲巻との間にも多くの共通項を有していると言える。先に述べたように、「年中行事絵巻」と甲・乙両巻との間にも多くの共通項が存在し、また、第一節において、乙巻との類似点を確認された「彦火々出見尊絵巻」にも、甲巻と共通する要素が見出せる。

「鳥獣人物戯画」甲・乙両巻と多くの共通項を持つことが確認された、これらの絵巻は、すべて、常盤源二光長を中心とする宮廷絵師集団によって制作されたと考えられている。

ところで、古代・中世の絵巻間に近似の姿態表現や形が認められた場合の可能性については、佐野みどり氏が、次のような見解を示している。「古代・中世の絵巻群から図様継承の実際を眺めると、形の同一性を顕著に示す例はむしろ特異で（制作の場の密接な関連を積極的に認めてよいと思われるが）〈後略〉」。従って、これらの宮廷絵師系絵巻と、「鳥獣人物戯画」甲・乙両巻との間に多くの共通項が確認できるという事実は、これらの絵巻と甲・乙両巻との制作環境の近さを示唆するものである可能性が高いと言えるだろう。従って、「鳥獣人物戯画」甲・乙両巻は、宮廷絵師によって制作された可能性を持つ絵巻だと言える。

第二章では、「甲巻の主題について」と題して、甲巻の主題の解明に取り組んだ。甲巻は、ストーリー性を感じさせる巧みな画面展開を見せるものの、詞書を全く伴っていないため、主題に関する幾つもの説が提示され続けて来た。しかし、そのどれもが確実な論証を伴ったものとは言い難く、その結果、未

だ通説と言えるものが存在しない。そこで、本章では甲巻の主題の解明を試みることにした。また、甲巻において主役のような役割を務める動物は数種に限定されることがわかる。そこから、主役の動物の選択条件について考察し、さらには、その条件が主題とも関連することを指摘した。

第二章第一節では、上野憲示氏によって提示された甲巻の復元案に検討を加えた。現甲巻には、料紙の欠落や錯簡がかなり認められる。そこで、上野氏は、残された甲巻系の断簡や数種の模本等を基に復元を試み、その結果、甲巻を、「復原A巻」と「復原B巻」という二巻に復元している。しかし上野氏の復元案に検討を加えた結果、「復原B巻」は無理に接続した部分があると判断できた。従って、現在の段階では、上野氏の「復原A巻」、住吉家伝来模本中の競馬場面が含まれる一巻どおりに展開する部分、現甲巻の第一紙から第十紙までという三つの部分に復元できると考えた。そして、本章では、それぞれを「Aグループ」、「Bグループ」、「Cグループ」と呼んで考察を進めることにした。

第二節では、前節で示した各グループの流れに沿いながら、それぞれに描かれている各場面が何の情景を表したものであるかを確認して行った。その結果、各グループごとの場面順は、以下のように展開していると考えられた。Aグループは、祭礼行列→相撲→双六運び→囲碁→腕押→頸引→走り高跳び→法会→導師への僧供→僧への禄→喧嘩→田楽。Bグループは、競馬→蹴鞠→船遊び。Cグループは、水遊び→的弓。

第三節では、先行研究によって提示された、甲巻の主題に関する諸説に検討を加えながら、甲巻の主題の解明を試みた。先学によって示された甲巻の主題に関する主な説を挙げて行くと以下ようになる。平安末期の退廃した貴族や僧侶の生活、あるいは新興武士を諷刺したものとする説。現在は失われてしまった動物説話を絵画化したものとする説。当時の年中行事の様子を、登場者を動物にして描いたものとする説。さらには、近年、五味文彦氏によって唱えられた、上野氏の「復原A巻」が御霊会を表したものであり、もう一方の「復原B巻」が年中行事を表したものであるという説。しかし、これらの説を検討したところ、どの説も甲巻の内容との間に矛盾を孕むものであると言える。

そこで、甲巻の主題について新たに考え直すために、前節において確認したA～Cグループの場面内容を改めて見直したところ、甲巻系絵巻に描かれる内容は、法会以外はすべて「遊び」に属する行為であることがわかった。そのため、甲巻系絵巻で最も多く描かれる「遊び」とは、本来、どのような意味を持つものであったのかを、民俗学の分野における研究業績に基づきながら確認した。その結果、折口信夫氏や和歌森太郎氏・樋口清之氏等によって唱えられた説を踏まえると、「遊び」とは本来の意味では鎮魂の動作であり、神や霊と交流するための神聖な行為であったと言える。従って、甲巻系絵巻で表されているのは、「遊び」や法会といった神仏との交流が可能となる場と言えるだろう。そして、そのような場において、人真似をして楽しそうに「遊ぶ」のは、第四節において述べるように、超越的霊力をもつ存在として選ばれた動物たちである。そのような性格を持つこの絵巻は、神霊を慰撫する能力を期待され、神霊との良好な関係を結ぶために制作されたものと考えられるのではないだろうか。

このような考え方を補強する材料としては、「年中行事絵巻住吉家伝来模本」巻十六の賀茂祭の行列中に描かれた風流傘の上に載る造り物を挙げることが出来る。ここには、三つの風流傘が描かれるが、その前から二番目の傘には、甲巻系絵巻に描かれる内容と細かな点まで類似する造り物が据えられていることがわかる。佐野みどり氏によると、「帽額や総で縁を飾ったかざしの大傘は、〈中略〉大がかりでかつ祝祭の聖性装置としての役割も明確なものであったと想像される」と言う。つまり、大傘に載る造り物として選ばれたこと自体が、この造り物の、祭礼という場における役割の重さを示していると言えるだろう。さらには、この一つ前の大傘の造り物は仙境を表したものであることがわかる。そのような仙境や蓬莱山といった異界は、出現それ自体が、吉祥のしるしと考えられ、高い聖性機能を持つ装置とし

て広く認識され、祭礼に頻出する造り物であった。「年中行事絵巻住吉家伝来模本」に描かれた賀茂祭の行列を見ると、先程指摘した甲巻系絵巻と良く似た造り物は、仙境の造り物という高い聖性機能を持つ存在と、並列的に、同じような大傘に載せられて登場していることがわかる。そのようにして祭礼行列に飾り立てられた理由としては、やはり、その内容が祝宴の場を聖化する能力に長けたもの、さらには、神を慰撫する能力に優れたものと見なされていたからではないだろうか。

第四節では、まず、甲巻系絵巻に登場するすべての動物について、行為者と見物者のどちらの役目を担うのか、或いは、擬人化されているかどうか等に注意しながら、各動物の役割を表にまとめた。その結果、甲巻系絵巻において行為者の役目をする者のほとんどが、擬人化された猿・兎・蛙であることが確かめられた。つまり、この絵巻において主役的存在に選ばれた動物は、猿・兎・蛙の三種類と言える。そこで、次には、どうしてこの三種が選ばれたのかを明らかにするために、日本の古代から中世の文献における、これら三動物の扱われ方を整理した。その結果、これら三種は、靈的力を具えた動物と見なされ、神の顕現や使者と考えられた側面を持つものであることが確認できた。つまり、甲巻系絵巻において描き表されているのは、神に近い存在と見なされた動物たちが、「遊び」という神を慰める行為を行っている様子だと言えるだろう。

ところで、甲巻系絵巻と同じように多くの擬人化された動物が登場するものとしては、動物昔話を挙げる事が出来るが、そこでも、甲巻系絵巻と共通するような条件の下に動物が選ばれていることがわかる。その条件については、桜井徳太郎氏が、次の四つを挙げている。第一には、日常生活に卑近な家畜はあまり登場しない。登場しても主役になることはほとんどない。第二には、単純な行動や性向を示す動物はあまり登場しない。第三には、人間に恐怖感や畏怖感を抱かせるものが主に登場する。第四には、その超越的靈力がかわれて神との交渉を成し得ると目される動物が主に登場する。そして、桜井氏は、第一から第三の条件は、第四の条件に帰結されると述べている。さらには、これらの条件は、本文中に挙げている文献群によって示されているように、甲巻系絵巻の主役的動物たちにも当てはまるものと言える。

それでは、なぜ神聖視された動物たちは擬人化されてきたのだろうか。それは、日本人の山中他界観に由来すると言えるだろう。古代の日本人は、人間の入り込めない山中の別世界にこそ神が鎮座すると信じ、そのため、人間は神と直接関わることは出来ないと考えた。但し、山中と人界との境域である山麓地帯では人間と野獣との接触が可能であった。そこで、人々は、山中に住む獣の挙動には、神の意思が反映しているのではないかと考えるようになり、同時に、神の意思を伝えるにふさわしい動物を定めて来たと思われる。そして、このような考え方から、人々は神の意思を明確に知るために、神の使者と見なした動物の挙動を詳細に観察するようになり、その観察が微細な箇所にもまで及んでくると、動物の表情や動作に喜怒哀楽を読み取るようになったのであろう。

このように、特定の動物に超越的靈力を認めて、その動物を擬人化して行くという思想の中から、一方では動物説話が生まれ、他方では甲巻系絵巻のようなものが描かれたと考えられるのではないだろうか。

以上のような考察から、甲巻系絵巻の主役に選ばれたのは、神聖視された動物たちだと言えるだろう。そして、そのような動物たちが楽しげに戯れ「遊ぶ」この絵巻は、やはり神霊を慰撫する機能を期待して制作されたものと考えられるだろう。

第三章では、「乙巻の制作目的について」と題して、筆癖や描写表現等の点から、甲巻と同時期に一具のものとして制作された可能性が高いと考えられる乙巻も、甲巻と同じように神意に適う内容を持つ絵巻であることを解明した。さらには、乙巻と同じように動物や靈獣を横に帯状に描き並べたものが、祭

祀の場において重要な機能を担って来たことを明らかにして、乙巻が、甲巻とともに祭祀空間との関わりにおいて制作されたと考えられることを指摘し、制作目的の面からも甲・乙両巻の一具性が確認できることを明らかにした。

第三章第一節では、昭和九年に下店静市氏によって唱えられて以来、長年、支持され続けて来た。乙巻を、「画者が、私に描き、私に秘蔵する粉本」であったとする説に対して検討を加えた。

この下店氏の説は、今なお一定の説得力を持ち続けていると言えるが、それは乙巻に以下のような特徴が認められるためである。第一に、最初に描いた線を白土で消して、新たに線を引き直すという修正箇所が幾つか確認できること。第二に、他の絵巻には見られないような細かく寸断された料紙が所々に挿入されていること。第三に、動物の種類によって紙面に比しての大小に極端な差が認められること。

しかし、これらの特徴は、以下のような考察から、乙巻が粉本であったという根拠にはなり得ないと言える。第一の点については、甲巻にも同じように白土を用いた修正箇所が認められ、また、白土で消していなくとも描線を引き直してしまうという修正も甲・乙両巻を通じて行われていることから、場合によっては白土も使用して修正を加えるという制作態度は、甲・乙両巻に共通したものであったと考えられる。第二の点については、上野憲示氏が既に指摘しているように、細かく寸断された料紙は、その前後の料紙と合わせると、ほぼ標準幅を保っていることから、「筆を誤った箇所を描き直すための苦肉の策」であったと考えられる。第一・第二の点が、このように考えられることから、第三の点とは、動物の種類によって典拠が異なることを示すに止まる事実だと考えられるだろう。以上のような検討結果から、乙巻は、やはり正本だと考える。

第二節では、まず、日本の古代から中世の文献、さらには、その時期には、日本に伝来していたと考えられる中国古代の文献において、乙巻に描かれた動物・霊獣たちが、どのように記されて来たかを、「乙巻の動物・霊獣に関する文献一覧」としてまとめた。その結果、乙巻に描かれた動物たちには、神を慰めることの出来る神聖な動物と見なされて来た側面や、或いは、邪気を払い、魔を鎮める威力を信じられて来た側面等が確認できた。

また、乙巻に描かれた動物・霊獣のほとんどは、各種類ごとに、様々な表情を見せる複数体によって構成されているが、「鷲」と「龍」のみは、それぞれ一体だけ描かれている。そして、この「鷲」と「龍」とは、平安時代において、どちらも『法華経』を暗示する動物・霊獣であったことが当時の文献から確認できる。特に「龍」の描かれている位置を見てみると、一つ前が「獅子」であり、一つ後が「象」であることがわかる。「獅子」とは、『法華経』第五巻において龍女を成仏に導く文殊菩薩を連想させる動物であり、また、「象」とは、『法華経』普賢菩薩勸発品において、法華経を深く信奉する者のために普賢菩薩が白象に乗って現れ守護すると説かれることから、普賢菩薩を連想させる動物であった。従って、獅子・龍・象の順番で描かれていることは、明らかに『法華経』を意識したためだと考えられえ。このような点から、乙巻は、『法華経』を暗示するモチーフを意識的に織り込んだ絵巻だとも言えるだろう。

第三節では、祭祀の場に付随する動物図・霊獣図の内、乙巻と同じように、横長の帯状の画面に動物や霊獣を描き並べたものを取り上げ、祭祀空間においての、それらの機能を明らかにすることを通して、乙巻に期待された機能について考察した。

まずは、第一例として、病氣平癒を祈願する祓えの場に見える絵馬について考察した。弘安十一年(一二八八)の奥書を持つ「山王霊験記絵巻」と、鎌倉末期頃に制作されたと考えられる「不動利益縁起絵巻」とに見える病氣平癒を祈願する祓えの場には、墨線のみで描き表された絵馬が認められる。河田貞氏の指摘等から、このような祓えの場に備えられた絵馬とは、実際に墨線主体のものであったと推測さ

れる。

これらの絵巻の内、「山王靈驗記絵巻」に記された詞書の中で、祓えの場面の相当する部分を見てみると、「靈驗ある諸社の神馬を勧請したけれど、祈願の効を無かった」という内容が記されていることがわかる。つまり、この祓えの場では、病氣平癒という祈願を達成するために、諸社に属する神馬の霊力の助けを借りようとしていたと解釈できる。そして、そのように神社に属する神馬の霊力に頼むということは、当然、それらの神馬が属する諸々の神社の靈驗をも頼りとしていたことを意味するだろう。このように陰陽師を招いて行われた祓えの場において、日本在来の神々の力が作用すると考えられていたことは、『紫式部日記』寛弘五年（一〇〇八）九月十日の条からも窺われる。従って、このような祓えの場とは、少なくとも当時の一般的な貴族たちにとっては、病氣平癒という祈願を達成するために、諸々の神社に祀られた神々の霊力を都合の良い方向に働かせるためのものだったと言える。

また、「山王靈驗記絵巻」と「不動利益縁起絵巻」のどちらの祓えの場においても、絵馬が備えられている場所は、大きな御幣を多数立て並べた祭壇の手前側の、祭壇に接するような箇所であることがわかる。これは、絵馬が、祭壇上に備えられたものと同じような機能を持つと認識されていたことの現れのように思われる。『小右記』寛仁二年（一〇一八）六月二十四日の条からは、御幣や供物を捧げることが、神との交流を持ち、神を任意に制御するための有効な手段だと考えられていたことが窺われる。従って、先に挙げた「山王靈驗記絵巻」の詞書等も踏まえると、祓えの場において御幣や供物と隣接するように設置されていた絵馬とは、八百万の神々と交流を持つ、さらには、それらの霊力を呼び寄せるという行為と関わりを持つものとして理解されていたように思われる。

ところで、神前に絵馬を奉納するという習俗は、馬という動物が神意に適う神聖な動物と見なされてきたという思想的背景に由来すると考えられているが、それだけでなく、絵馬として奉納された馬図は、奉納先の神の乗り物となると考えられていたことが、『本朝法華驗記』第一二八「紀伊国美奈倍道祖神」という説話から窺われる。

先に見て来たように、祓えの場に備えられた絵馬とは、諸社の神々の霊力を都合の良い方向に導くためのものとして用いられていたと考えられるが、それは、絵馬として描かれた馬図が、神が活動する際の乗り物としての役目を果たすと考えられていたこととも関わりがあるように思われる。つまりは、先に挙げた「山王靈驗記絵巻」の詞書によると、祓えの場に備えられた絵馬とは、「諸社の神馬」を描いたものであり、「諸社の神馬」であるならば、既に神の乗り物としての役目を担っていたと考えられ、そのような神馬を描いた図であるならば、自らが属する神の靈驗の一端さえも招き寄せるような、言わば、神の依り代のような役目も果たすと考えられていたのではないだろうか。そして、そのような機能を持つが故に、神々の霊力を都合の良い方向に導く機能をも有すると見なされていたと言えるだろう。

次に、第二例として、即位式の際に大極殿を飾った「獣形帽額」について考察した。「獣形帽額」の図柄を描き留めている最も古い記録は、「文安御即位調度図」（『群書類従』第七輯所収）であるが、この図の制作時期については、岩橋小弥太氏や福山敏男氏等の研究によって、平安時代であることが指摘されている。つまりは、同図の中に描かれる「獣形帽額」は、平安時代の即位式に用いられたものと考えられ、その注記に「大極殿南栄上十一間」に「懸け亘す」とあることから、即位式の際に新天皇が座す空間を囲むように懸け巡らされていたことがわかり、そのことは、この帽額が、新天皇が誕生する場と深く関わることを意味すると言えるだろう。

平安時代以前から、即位式において新天皇が座す場所は、大極殿内に設置される高御座内であるが、この高御座の由来については、和田萃氏が次のように考察している。和田氏は、古代の昇壇即位形態における「壇」とは「壇所（かむには）」という神を祀る場と関連があるとし、「壇所は、巨岩上の祭場を

意味し、元来は、そこにヒモロギを立てて、神の降臨を願う場所であったと考えられよう」と述べ、さらには、即位式において新天皇が「壇上に立つのは、神（大王家の祖霊あるいは祖先神か）を祀り、その降臨により、聖性を身に付与するためであったと思われる」と述べている。

平安時代の即位式に登場する高御座が、この昇壇即位における「壇」の機能をどの程度まで受け継いでいたかは明らかにされてはいない。しかし、即位式における高御座が、新天皇という言わば新たな神的存在が誕生する座として用いられていたことを踏まえると、やはり祭祀空間と同等な神聖な場として認識されていた可能性は高いと言えるだろう。

ところで、「文安御即位調度図」に記された「獣形帽額」を見てみると、左向きに進む姿勢を示す霊獣十二体と、右向きに進む姿勢を示す霊獣十二体とが表され、その中央で二体の龍が向き合う形となっていることがわかる。そして、これと同じような画面形式を示すものとしては、正倉院中倉「十二支彩絵布幕」を挙げることが出来る。この「十二支彩絵布幕」は、祭祀空間を囲むように懸け巡らされたものと推測される。そして、幕に描かれた十二支獣の霊力によって、祭祀を行う空間に邪気が入り込むのを防ぎ、そこに祭祀儀礼に適した聖域を形成する機能を担ったものと思われる。従って、同じような画面形式を示す「獣形帽額」もまた、高御座という言わば祭祀の場を外界から結界して、即位という祭祀儀礼に適した聖域を形成する機能を担ったと考えられるだろう。

先に考察した第一例は、神意に適う動物が白描で描き並べられているという点で乙巻と共通しており、また、第二例は、様々な霊獣が帯状の画面に横に描き連ねられているという点で乙巻と共通している。このように乙巻と類似した画面形式を持つものが、ほぼ同時代に、祭祀空間において、神の来臨に関わるような重要な役目を担っていたという事実は、乙巻が祭祀空間のために制作されたものであることを示しているように思われる。

ところで、乙巻には『法華経』を暗示するモチーフが意識的に織り込まれていることを先に指摘したが、甲巻において主役の役割を果たす「猿」と、甲巻系絵巻の当初からの巻末部分と思われる箇所が登場する「蛇」もまた、『法華経』を暗示する動物と見なされていたことが、日本の古代・中世の文献からも確認できる。

このように『法華経』を暗示するモチーフが認められる甲・乙両巻は、第二章と第三章の考察結果から、共に神意に適う絵巻として制作されたと考えられる。従って、「鳥獣人物戯画」甲・乙とは、法華経信仰と深い関わりを持つ同一の社の為に制作された絵巻であるという結論に達した。

論文審査結果の要旨

本論文は、京都母尾の高山寺に伝来する『鳥獣人物戯画』甲・乙・丙・丁の四巻のうち、著名な擬人化された猿・兎・蛙が遊戯し、法会を営むところを描く甲巻と動物・霊獣を描き並べた乙巻が抱える諸問題について、独自の視点で、先行研究の是非を問いつつ、解明し解釈を下したものである。

本論文は三章からなり、これらの前後に序章と終章が付いて構成される。

「序章―研究課題と研究方法」では、本論文で解明すべき筆者・主題・制作目的の問題と方法について述べる。

「第一章 甲・乙巻の筆者問題について―宮廷絵師制作の可能性をめぐって―」

「はじめに―旧永久寺伝来「真言八祖行状図」と共通する描写表現を指摘しながら―」

ここでは、先行研究において、平安時代後期（保延2年―1136）に宮廷絵師藤原宗弘によって描かれ

た廃寺永久寺真言堂障子絵の真言八祖行状図と甲・乙巻の共通した描写表現に、さらに新知見を加え、甲・乙巻の筆者を絵仏師とする説に再検討を促す。

「第一節 乙巻と「伴大納言絵巻」「彦火々出見尊絵巻」「年中行事絵巻」との共通項」

本節では、乙巻と「伴大納言絵巻」の馬と犬、乙巻の獅子と宮廷絵師常磐源二光長周辺の制作とされる「彦火々出見尊絵巻」（模本・1624-44 狩野種泰筆写）の霊獣は相似し、乙巻と「彦火々出」の麒麟、乙巻と「彦火々出」の犀は酷似し、さらに乙巻の犬のつつ組み合いと「年中行事絵巻」鷹司家旧蔵模本の馬のつつ組み合いの姿態が相似することを指摘する。

「第二節 甲巻と「年中行事絵巻」・「伴大納言絵巻」との共通項」

本節では、甲巻系断簡（東京国立博物館）の蛙と原本が常磐源二光長を中心とする複数の宮廷絵師の制作とされる年中行事絵巻住吉家伝来模本（住吉如慶広通筆写）の馬長行列の人物の姿態表現など先行研究で指摘されるものの他に、甲巻の逃げる猿と追う兎・蛙の組み合わせと住吉家伝来本の逃げる犯人と追う検非違使と相似するなどいくつか新しく指摘する。また、細かい点で、甲巻の念仏を唱えて合掌する猿の持つ杖に巻き付けられている数珠・草と住吉家伝来模本の遊行聖の持つ鹿杖の数珠・草、さらに甲巻の猿が木の葉をまとっているのは聖特有の粗末な僧衣をあらわしたものとみる。甲巻の田楽を踊る蛙のうち、蓮の葉を一匹が右手に執る扇と同じような図柄を施した扇が住吉家伝来模本にいくつか見出せる。これらの比較・検討から年中行事絵巻と甲・乙巻とは姿態表現や動物の描き方、登場者の出方、持物等の点において、多くの共通した要素を持ち、甲・乙巻がきわめて近い環境において制作された可能性の高いことを指摘する。

最後に、甲巻と伴大の共通項として、まず姿態表現において、甲巻系高松家旧蔵断簡の落馬の後、鹿を追っかける猿騎手の姿と伴大の両手で烏帽子を押さえながら走る男や甲巻系益田家断簡の猿騎手が乗った出走直前の鹿（反転）と伴大の振り返る役人の乗った馬などをあげる。次に異時同図法の用い方では、甲巻の相撲、甲巻系長尾家旧蔵模本の走り高跳びと伴大の有名な子供の喧嘩をあげ、内容の展開のさせ方として、甲巻の喧嘩と伴大の応天門炎上にあって、事件の結果が先に描かれ、原因が後に描かれることをあげる。さらに登場者は行動するものと見物するものに分けられ、臨場感を高めるために甲巻の相撲や的弓や伴大の応天門の炎上をあげる。以上の比較、考証から『鳥獣人物戯画』甲・乙巻と年中行事絵巻と伴大納言絵巻の三者は、同様の制作の場から誕生した可能性を指摘する。

「第二章 甲巻の主題について」

「はじめに」において、主題の解明と猿・兎・蛙など主役的動物の選択条件について考察し、その条件が主題とも関連することを指摘する。

「第一節 復元試案」

本節では、三つのグループに分け、(1)Aグループ「復元A巻」（天文16年—1547まで損傷を受けない巻）、(2)Bグループ「住吉家伝来模本」中のⅡ巻どおりに展開する部分（天文16年損傷を受けた部分）、(3)Cグループ「現甲巻第一紙から第十紙」とする。

「第二節 場面内容の検討」

それぞれの場面について詳述する。(1)Aグループ（東京国立博物館断簡、現甲巻巻16紙、長尾家旧蔵

模本、現甲巻第11紙以後含む)

①祭礼行事(途中) ②相撲 ③双六運び ④腕押 ⑤頸引 ⑥走り高跳び ⑦法会 ⑧導師への僧供 ⑨僧への禄 ⑩喧嘩 ⑪田楽 巻末蛇の出現 (2)Bグループ(住吉家伝来模本中のⅡ巻、益田家旧蔵断簡、高松家旧蔵断簡、MIHO MUSEUM) ①競馬 ②蹴鞠 ③船遊び (3)Cグループ(現甲巻、第1紙—第10紙) ①水遊び ②的弓

「第三節 主題について」

本節では、先行研究の諸説(風刺説・動物説話説・年中行事説・御霊会説)を紹介し、疑問を呈し、甲巻系絵巻全体の主題として、Aグループの祭礼行列・法会・田楽を除き、BCグループとも遊戯が主として描かれているところから、「遊び」の本来的な意味が「鎮魂」であることに着目し、民俗学の研究を踏まえて、御霊を慰撫する能力を期待し、神霊との良好な関係を結ぶために制作されたものと推察し、この考えを補強する例として、住吉家伝来模本の賀茂祭の行列中に描かれた風流傘の上に甲巻系絵巻と細かな点まで類似する造り物が据えられていることをあげる。

「第四節 主役の条件—神聖視された猿・兎・蛙」

本節では、甲巻系絵巻で主役的に選ばれた動物には猿・兎・蛙の三種類であるが、なぜ、これら三種類が選ばれたかについて、古代から中世の文献を博搜し、それらが霊的力を持つ動物と見なされ、神の顕現や使者と考えられてきた側面を持つことを確認する。よって、甲巻系絵巻に描き表されているのは、神に近い存在と目された動物たちが「遊び」という神を慰める行為を行っている様子であり、神聖視された動物たちが楽しげに戯れ「遊ぶ」この甲巻を、神霊を慰撫する機能を期待して制作されたものと結論する。そして、このような機能をもつ絵巻を企画した人物として、平安後期に多数の絵巻制作を企画し、かつ自らと神霊との関係に常に敏感であった後白河院(大治2年—建久3年 1127-92 在位1155-58)をあげる。また、絵巻が白描で描かれているのは、神社等の神域との関係で制作されたものとし、絵巻の企画者が後白河院であったとすれば、このような機能をもつ絵巻は、院と深い縁を持ち、かつ御霊を慰撫する威力を備えた社の遷宮や祭礼に合わせて制作された可能性を説く。

「第三章 乙巻の制作目的について」

「はじめに」では、先行研究から甲・乙巻は、ほぼ同時期に、一具のものとして制作された可能性があり、したがって第二章で甲巻の制作目的が、神霊の慰撫にあったと結論づけているので、乙巻も甲巻と同じく神意にかなう内容をもつ絵巻であることを明らかにし、動物・霊獣を横に描き並べる画面形式から、乙巻が甲巻とともに祭祀空間との関わりにおいて制作された絵巻である可能性を指摘する。

「第一節 粉本節の検討」

本節では、先行研究で乙巻が画者の私的な手控えである粉本節を再検討し、動物写生的な性格をもつ正本説をとる。

「第二節 乙巻に描かれた動物たち—霊的力を信じられた動物たち」

本節では、描かれた動物—馬・牛・鷹・犬・鶏・鶯・鳶・水犀・麒麟・豹・山羊・虎・獅子・龍・象・獏—について記された中国古代の文献、日本の古代から中世の文献から、それらは神を慰めることのできる神聖な動物と見なされてきた側面や邪気を払い、魔を鎮める威力が信じられてきた側面を確認し、

動物・靈獸のいくつかは正倉院からの伝統が色濃く認められることや『法華經』を暗示するモチーフが意識的に組み込まれていることを考察する。

「第三節 神域に見える動物図・靈獸図―横に描き連ねるという形式―」

本節では、乙巻は靈獸を横に描き連ねたものであるが、このような帯状の画面に描き並べたものが、神の降臨を願う祭祀の場に用いられた例として祓えの場における絵馬や即位式の獸形帽額などをあげ、それらの祭祀空間における機能を明らかにし、乙巻に期待された機能について考察する。また、乙巻には陰陽両面を意識して、動物・靈獸を二体ずつ描かれているが、このことはそれらの靈的力を意識して制作されたことを示し、乙巻が祭礼の場のために制作された絵巻であり、さらに『法華經』を意識したモチーフが組み込まれていることを考え、法華經信仰と深い関わりを持つ社等の儀礼に合わせて制作された可能性を示す。

「おわりに」

ここでは、結論として甲・乙巻には、ともに『法華經』を暗示するモチーフが織り込まれ、甲・乙巻が法華經信仰と深い関わりを持つ同一の社のために制作された絵巻とする。「終章―結論―」では、第一章・第二章・第三章のそれぞれの結論を述べ、絵巻制作の企画者とされる後白河院の絵巻制作とそれらを収めた蓮華王院宝蔵のこと、日吉大社への信仰態度、天台宗への傾倒と甲・乙巻に天台宗が所依經典とする『法華經』を暗示するモチーフが織り込まれていることから、甲・乙巻は後白河院と深い縁をもつ社のために制作された絵巻であることを結論として述べる。以上のごとく、本論文は比較・考証において実証的で説得性に富むところが多々認められる。他方、新しい視点による解釈については具体性や実証性に欠けるところなくはないが、研究の滞っている『鳥獸人物戯画』甲・乙巻を見直すとともに、平安時代後期(12世紀)の絵巻研究に寄与するところ多大なものがある。よって、本論文の提出者は、博士(文学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。